平成 31 年度第 3 回　立川市文化振興推進委員会　会議録（要旨）

開催日時	令和元年 12 月 18 日（水曜日）　午後　3 時～5 時
開催場所	立川市役所 202 会議室
次第	１.開会 ２.立川市第４次文化振興計画策定に向けて (1)【施策の体系】（案）と【重点取組項目】（案）の検討 (2)成果指標（案）の検討 (3)到達目標の検討 (4)計画書について ３.その他
配布資料	・第４次文化振興計画　施策の体系・重点取組項目（案） ・第３次文化振興計画　施策の体系・重点取組項目 ・施策の体系・重点取組項目　変更理由 ・立川市の文化芸術振興（今井委員長） ・立川市第４次文化振興計画【施策の体系】案（倉迫オブザーバー） ・成果指標（案） ・立川市第３次文化振興計画　成果指標 ・施策 10 文化芸術の振興（後期基本計画素案より抜粋） ・第 4 次文化振興計画策定スケジュール（案） ・令和元年度第２回立川文化振興推進委員会　会議録（要旨） ＋まとめ写真
出席者（敬称略）	［委員］ 委員長　今井良朗、副委員長　吉成順、 高木誠、田ヶ谷省三、玉川宗則、槇島藍、宮田龍之介、矢内はな恵、綿引康司　（敬称略） ［事務局］ 産業文化スポーツ部長　矢ノ口美穂、地域文化課長　比留間幸広、生涯学習推進センター長　五十嵐誠、地域文化振興財団事務局長　加登義哉、地域文化課文化振興係長　柳澤彰子、地域文化課市史編さん担当主査　小川始、地域文化振興財団文化事業係長　足立香織、地域文化課文化振興係主任　田中準
公開及び非公開	公開
傍聴者数	２人
会議結果	・次回、会議で出た意見を反映させて計画書の形としたものについて検討を進め、答申を作成する。 ・次回の会議は、１月 21 日を予定。
担当	産業文化スポーツ部地域文化課文化振興係 電話　042 - 506 - 0012

■会議内容（要旨）

１．開会

・委員長の司会により開会

・事務局より、資料について確認があった。

２．立川市第４次文化振興計画の策定に向けて

(1)【施策の体系】（案）と【重点取組項目】（案）の検討

・事務局より、第４次計画の【施策の体系】と【重点取組項目】の案について、これまでの議論を反映させた点等を含め説明があった。

（Ａ委員）　施策の体系の取組方針「つなげる、ひろげる」の実施項目に他分野との連携とあるが、庁内での他部署との連携も必要になってくると考えている。この項目を加えることによって庁内の情報共有など、推進体制も変わっていくと考えてよいか。

（事務局）　計画として決定すれば、これを基に進めていくことになるので、他部署との連携もとっていくことになる。

（Ａ委員）　以前も話が出ていた通り、教育関係や福祉関係と連携を取ることができれば可能性は広がると思う。まず庁内で関係部署と連携を取ることでその部分をサポートしていってもらいたい。

（委員長）　具体的にどこと連携を取るか等、挙げられるとなおよい。

（Ｂ委員）　このような議論を進めていくと、どうしても芸術の側面が強くなるが、文化というのはそこで生活をしている人達のカルチャーで、ひとつの到達目標として、生活をしていく中に色々なものがあるという側面をしっかり見ておくべきだと思う。楽しみを増やしていく等の部分もどこかで触れておく必要がある。逆説的な言い方をすれば、経済的な利益を求めるのではなく、そこに生きている人達が楽しみを持つということである。また、文化芸術というとどうしてもカテゴリーが固まっている部分がある。例えば財団が行っている事業だとアート系のものが弱い等がある。したがってこのような種類の議論をしているとそのあたりのことが全面に出てきやすい。しかし立川は近隣市と比べてリソースが沢山ある。それをうまく活用していくという意味で、シティプロモーションとのつながりなど具体的に落とし込む際には留意したほうがよいと思う。個人的に一番興味があるのは国文学研究所で、世界的にレベルの高い資産を持っている施設である。そういった話が意外と世間に知られていないのがもったいないと思っている。

計画を立てる際、アーティストたちが供給するという側面と、受け取る側の側面という２つの面が混在してしまい、計画をみた時に分からなくなってしまうことがある。そのあたりの部分を分けて作成したほうが分かりやすくなる。

立川にはいろいろな資源があるので、それを活用していくことを具体的に考えていくべきだと思う。

（委員長）　全くその通りだと思う。資料４の成果指標（案）の中に「日ごろから文化芸術に触れる機会があると思う市民の割合」とあるが、ここがすごく大事な部分だと思う。様々なものがある中で、それが生活とどうつながっていくか、それをみていくのがこのような委員会であったり、ここで決められていくひとつの方向性なのだと思う。しかし、意外とこのあたりのことが議論されなかったりするので、芸術というくくりでは無い部分についても議論が必要だと思う。生きるために表現がある、生きるために様々を享受する、そういった観点を立川市はできるだけ明確に打ち出していってよいと思う。

（Ｃ委員）　「文化芸術の担い手の支援」で「文化芸術に関わるボランティアの育成」、「アーティスト活動の支援」とあるが、どちらも大変なことでおろそかにできない。もう少し具体的な文言が盛り込めたらと思う。

（委員長）　例えばどのようなことが考えられるか。

（Ｃ委員）　この２つ自体、連携が難しいと思っている。作り手と受け手を同時に支援することはとても難しいので、どちらかに重きを置いた方がよい施策はしやすいのではないか。どちらを支援するのもコストが掛かるので、両方出来るのか疑問がある。

（委員長）　これまでは、全体を包み込むような形で支援する、となっているところが多かったが、もっと積極的にアーティストを支援すべきだという意見が出ていたのでこのような表記になった。また、受け手の話があったが、受け手というよりはつなぎ手という意味になっている。これまではその部分を「関わる人」という曖昧な言葉にしていたが「もう少し具体的にどういう人を大事にしなければいけないのか示すべき」という意見があり、今回具体的にアピールした形になっている。実際難しいところではあるが、具体的にしていかないと結果的に何も出てこない。そのためにこのような項目が作られている。

（Ｄ委員）　ボランティアの育成やアーティストの支援など、実際誰がどのように行うのかを具体的にしておいたほうが良い。せっかくいい案が出ているのに具体的にしないとこのまま無くなってしまう恐れがあり、もったいない。

（委員長）　具体的なやり方まで書くのは難しいが、ある程度の方向性はこれから出てくることが望ましい。ただし、ボランティアに関しても既に行われている部分があり、そこをもう少し拡張していくとよい。拡張するにはどういう方向があるかを示していく必要がある。今、財団は舞台を中心に行っているが、それをさらに広げるとしたらどこまで広げることができるか等、具体的なことを案の中に加味していきたい。

（事務局）　「施策の体系」はあくまで柱の部分なので、具体的なことは本文で説明をしたいと思う。ボランティアとアーティストの件で、ボランティアについては現

在財団で行っている。また、立川文化芸術のまちづくり協議会でもボランティアの育成を行っている。

（Ｅ委員）　ボランティアの育成については、立川文化芸術のまちづくり協議会で「市民ライター育成講座」を行っている。立川ビルボードというサイトがあり、地域の方も巻き込んで市民ライターに記事を書いてもらえるように、一昨年リニューアルした。現在ライター講座出身で記事を書いている方が５人いる。記事を書いてもらうことが新たな発見や機会が生まれる場にもなっており、非常に良い雰囲気である。今年度は、例年通り講座開催の周知をしたが受講者が集まらなかったので、フェイスブックの広告を使用したところ 12 人ほど希望者が出た。このような活動をしているというのを知らない方がまだまだ沢山いるし、広報活動が大事だということを改めて感じた。何よりもこのような活動を知らないことが市民にとっての損失だと思うので、何とかしてそこまで届くような施策を考えていくことが必要だと思う。

実施項目の中に「市民の文化芸術活動支援」と「アーティスト活動の支援」とあるが、どこが違うのか。市民でアーティストの人はどちらに入るのか、線引きが分かりづらい。また、情報発信の強化だが、立川はこういう街だというのがイメージできるキーワードがあると効果的である。

また「多様な主体や他の文化との連携」とあるが、コーディネート役で行政以外の誰かが入るという前提で実施項目として考えていった方が現実的である。

（委員長）　コーディネーター役を誰が担うかは非常に難しい問題である。現状は市、財団、まちづくり協議会等いくつかの中で行っているところもあるが、もう少し広がった形になるのか、あるいは新たなものが出来上がっていくのかも検討していかなければならない。

（事務局）　財団では現在、中期経営計画を策定中である。市民と協働で何かを作っていくときに、財団が、コーディネーター役のようなまとめ役を担うという面はあるが、現状で手一杯でもあり、今後はそういった中心になるような人材を育てていける体制をとれるよう議論している。「文化芸術を支える人材」とあるが、そこではこういったことも含まれているのではないか。

（委員長）　今まで意見が出てきているように、結果的にどのようにつないでいくか、となった時に、今ある組織を丁寧に見返して検討していくことも必要かもしれない。そのような具体的な方向性が、次の段階で行われることだと思う。最終的には全体の体系だけでなく、中の文言にどういったものを入れていくのかも重要になってくる。また、先ほど意見に出ていた市民とアーティストの線引きなど、このあたりの文言も丁寧に整理していく必要がある。

（事務局）　市民の文化芸術活動支援については趣味として行っている活動の支援となり、アーティスト活動の支援については、プロとして活動を行う若い人などを支援していくという分け方をしている。

（Ｄ委員）　いろいろな人たちをつなげる役割を担うところは必要になってくる。具体的にどこが行うのかを考えなければいけない。ボランティア育成やアーティスト支援はお金が掛かるもの。どのように支援していくか、具体的に決めておかないと立ち消えになってしまうので、そのあたりもみんなで考えていきたい。

（委員長）　そのあたりの財源的なことについてはどうなのか。

（事務局）　この計画は、市が単独で行うものではなく、市民や事業者などみんなで進めていく、というものである。まちづくり協議会のように、みんなでお金を出しあってアーティストを支援したり、アールブリュットのように、ボランティアで活動したりとさまざまで、財源的には厳しい面もある。

（委員長）　財団ならばどうやって人員を増やしていくか、市ならばどうやって財源を確保していくか、この計画とは別物として考えていかなければならない部分もある。

（事務局）　立川市と国立音楽大学は協定を結んでおり、音大生がコンサートをしたり、市民を無料でコンサートに招待したり、学長にもコンサートに出演してもらったりしている。みんなで手をつなぎ合っていこう、というのが目標である。

（Ａ委員）　アーティスト活動の支援という部分の「アーティスト」は多様であるべき。多様な主体の発表の機会を確保するという意味では、プロのアーティストだけでなく市民アーティストも、のように多様性を持たせた方が良い。

「シティープロモーションの展開」というところで、前回の会議で国際的な発信もしているということだったので、「国内外の」や「国際的な」のような文言を入れてもよいかもしれない。

（副委員長）　会議に参加させていただいてずっと疑問に思っていた部分なのだが、この計画で言われている「文化」というのはどういう意味なのか。なんとなく概念があるものとして議論されてきたが、結局何を意味しているのかが分からないままでいる。個人的な理解としては、例えば茶碗と箸で食事をすることも文化だし、衣食住すべてが文化であると認識している。その文化を促進するというのは、どういうことなのかがわからない。いろいろなことが文化に該当すると思うのだが、そのことに関しては議論の対象となっていない。行政の定義として、文化の意味があるのならば教えていただきたい。

（事務局）　第１次の文化振興計画の時に、文化というのは様々なところにあり、福祉や環境、教育など多岐にわたる文化のことについて計画を立てた。第２次の計画の際にはそこから文化芸術の分野に絞り、福祉や環境などについては、それぞれの個別計画に任せることになった。そのような流れで第３次、そして今回の計画ときている。

（副委員長）　対象はいろいろあるが、そこから福祉などを除いて文化芸術に絞ったと言うが、その場合の「文化」がよくわからない。

（委員長）　文化芸術というのはもともと国が決めた文言である。一般的には文化芸術という言葉は使わず、芸術文化という言葉を使う。文化芸術となると衣食住や技能など、すべてのものが意味合いとして入ってくる。芸術が後ろに来ていることでややこしくなっている。

（副委員長）　国は法律等で決めているのか。

（委員長）　文化芸術基本法として 20 年くらい前に定められている。

（Ｂ委員）　文化というのは、人間が生きている全てのことである。だが、全てのことをとらえるのではなく、人間が余暇を楽しむところの充実というのが、昔よく言われていた文化的生活の延長線上にある、と理解して議論をしてきた。かなり芸術に近いところに論点はあるのではと思い、このような場に参加している。

（委員長）　大学で教えるとき、まず初めに芸術と文化について話をする。そのときまず話すのは、衣食住についてのことである。生活の中からどういったものが生まれてきたか、それがどのように発展して芸能や芸術になっていったか、そこを全部見ていかないと見えてこない部分があると思う。そういう前提が本当はある。

以前にも文化芸術とは何を意味しているか、という議論はあった。しかしそもそも国が決めている文言なのでそれにならうしかないのではないか。実際は芸術文化について語られていると思う。

（Ｆ委員）　委員長、オブザーバーの方針の意見も加わり、より具体的になってきたと思う。少しずつ前進している感じが出ていてとてもよい。また、取り組み方針に新しい枠が増えたり、重点項目も明確になり、とても楽しみである。

視点が変わるが、先日 COP25 でオランダ人の少女が演説をして、それが世界に配信されていたが、とても素晴らしい少女だと感心した。「今ある危機は行動しないことだ、政治家は説明ばかりで物事に取り組もうとしない」という内容の演説だった。若者の力は率直で怖い部分もあるが、的を得ていると感じた。今まで市役所のいろいろな委員会に関わってきて、政策・施策などを見てきたが、市役所は多様な人が多様な視点から意見してくる中で、取りこぼしなく、いろいろなことに目を配らなければいけないので、とても難しい部分があると感じた。また、さまざまな計画があり、使える予算や人材も限られているので、すべての人を満足させるのは難しいと思う。今回施策の体系（案）をみて感じたのは、これを少しでも進めて行動に移すことが大事であるということ。先ほどコーディネーターの話、アーティストの支援の話などいろいろ意見が出ていたが、実際に実行していく中で解決できるのではないか。市民を納得させながらひとつづつ、力強く進んでいけたらよいと思う。

アートディレクターの北川フラムさんは、ファーレを振り出しにいろいろな新しいことを進めて、今では各地で活躍している。では原点となった立川はどうなっているのか、ここで活躍した人たちはどうなっているのか、と考えたときに、

つながりが無いように思う。またファーレ立川のアートが出来て、その後、さらに作品群を増やしていこうという話もあったが、それ増えていない。平田オリザさんが講演会で、「文化に力を入れるとまちが活気づいて人が変わり、市が変わる」と言っていた。あれこれ議論することも大事だが、まずは方針を決めたらとにかく実行していく、評価を出しながら進めていく、ということが大事だと思う。また、重点的に取り組んだものとそうでないもので、どれだけ当初の話し合いと結果が違ってきたかということも、是非評価に出してもらいたい。今回の資料にある第３次文化振興計画の成果指標について、目標値を達成できているという点でしか評価できていないが、もう少しいろいろな角度から成果について評価できれば良いと思う。

・事務局より重点取組項目の案について説明があった。

（Ａ委員）　２つ目の重点取組項目である「学生・若者・障害者等の文化芸術活動への参加促進」について、参加促進した後は市民が多様な文化芸術に触れることになる。多様な文化芸術に対する関心を深めてもらうことも重要になってくるのではないか。若者や障害者の方が作ったものに市民が触れて、多様な芸術について理解してもらうことも重要だと思う。

（Ｅ委員）　昭島市の例だが、昭和飛行機工業という企業に昭島市の職員が定期的に出向しているという話を聞いた。職員が出向することで、昭島市の文化系のイベントを昭和飛行機工業の中で作ったり、委員会を作ったりなどして連携を深め、相互にとってプラスになるような取り組みを行っている。市の職員が出向した際には、市の枠にとらわれないので動きやすいという利点がある。立川市も民間企業に出向という形が取れると、他の分野との連携が取れるようになり、「文化芸術を活かしたシティプロモーションの展開」も実現していけるのではないか。また「市民の文化芸術活動支援」は重点取組項目になってるが、アーティスト活動の支援はそこには入らないということなので、違いが分かるように、表現を変えた方がよいと思う。

（委員長）　文言変更については、今日この場でというのは難しいので、後日メール等で意見を出してもらえるとよい。

（Ｃ委員）　シティプロモーションの展開について、１つ気になることがあるが、姉妹都市の大町市については今回の施策に盛り込まなくてよいのか。両市とも北川フラムさんに縁もあるので、立川市と大町市の文化的なプロモーションの繋がりという面でも入れてもよいのではないか。

（事務局）　そこについては実施項目にある「多様な主体」に入ってくる部分である。どんな形で載せるか、本文で検討したい。また大町市との交流については、市の別の計画にも入ってくると思う。

（委員長）　立川市のウェブサイトは、立川ビルボードなどのサイトと連携しているのか。

（事務局）　文化芸術のまちづくり協議会を紹介するページにリンクを貼り、そこから飛べるようにはなっている。

（委員長）　市のホームページはとても分かりにくく、余程のことがないとそのページに入っていくことはないと思う。このあたりももっと連携を深めていく必要がある。またファーレ立川アートの作家のサイトとリンクし、市のホームページからもアクセスできるような繋がりがあったほうが良い。ファーレ立川アートや財団など、いろいろなサイトがうまく繋がっていくような、マップのようなサイトがあるとよい。

（Ｆ委員）　初回の委員会の際に、スポーツも文化なのでは？という意見がでていた。後日職員の方に話を聞いたところ、スポーツはスポーツ部局が担当している計画があるので、ここでは文化芸術について議論をして欲しいということだった。こういう縦系列の状況が出来上がってしまっているので、横との繋がりや連携が取りづらくなっている面もあるのではないか。

また、コーディネーターの話も出ていたが、コーディネーターはとても必要とされている仕事であり、例えば市では学校と地域を結ぶコーディネーターを募集しているが、なかなか人材が集まっていないようである。原因はコーディネーターの仕事の中身がよく分からないからではないか。まちづくり協議会が行っている「アートサポーター養成講座」のように、コーディネーター講座を開いて学んでもらい、実際に働けそうな人には仕事を紹介したり派遣したりする制度を作れば、立川は変われるかもしれない。

（委員長）　そういったことについて実例を聞くことも大事だと思う。例えば徳島県の神山町に大南さんというコーディネーターがいるが、そういう方を呼んで話を聞くのもよい。

(2)成果指標（案）の検討

・事務局より、成果指標の案について説明があった。

（Ｂ委員）　「歴史民俗資料館の収集資料点数」を成果指標にするのはいかがなものか。聞いたところによると、歴史民俗資料館は資料が集まりすぎて、入りきらなくなってきているようである。そのような状況ならば、数を集めるよりもその資料を基に立川の歴史を市民にもっと知ってもらうことを着眼点にした成果指標にするべきではないか。資料館の場所はとても行きにくい。そこに来てもらう

ため、リスルホールのロビーで資料を展示するなどの発想で立川の歴史を知ってもらう、という考え方がもっとあってもよいのではないか。歴史については重要度が浅い感じがするので、着眼点を変えた指標にしてもらえるとよい。

（事務局）　指標の件については、以前から議論してきているところではあるが、市民の方が文化財にどれだけ関心を持っているか、という点で指標としている。最近の傾向として、こういったものへの関心が薄れてきているところがある。その中で、ただ資料として蓄積させるのではなく、集めたものをきちんと活用できるようにすることが、最終的な使命だと考えている。それを行うことにより、資料の寄贈も確保できるので、そうした面から資料点数を指標としている。
歴史民俗資料館としても企画展など行っているが、なかなか市民にアピールできていないのが現状だと思っている。地理的な面での課題はあるが、そういうことを行うことが使命だと考えている。また、出前講座として、収蔵している文化財を学校などに持ち出し、学んでもらう取組も行っている。

（Ｂ委員）　歴史については、もっと積極的に展開して欲しい分野である。この街がどの様にして出来上がってきたか、ということを是非、市民の方に知ってもらいたいので、文化財などは有効活用していただきたい。文化財も文化の一つなので、スポットを当ててもらいたい。

（委員長）　歴史民俗資料というのは、生活から出発してそこに付加価値がついて、目的・技能が加わり、芸術になっていった。次にやらなければいけないのは、その芸術をもう一度生活に戻すということで、戻すためにはどうすればよいか、そこを考えていくことが文化振興なのだと思っている。そういう意味では、これからの活動が生活の中に戻っていく、という風に考えていけば、先ほど出ていた文化の問題というのもどこかしらで共有できていくのかもしれない。

（Ｆ委員）　立川にはどういう歴史があるのか、興味を持って図書館で資料を見てみると、かつては飛行場があり、飛行機の街だったという面がある。その部分は少し欠けていると感じている。現在、外国人観光客を積極的に受け入れるという流れがあるが、外国人が日本に来る理由に、歴史と文化のある街をみたい、ということがあり、その民族だけが持っている独特の生活様式に興味があるようだ。
そういった意味では、先ほど話があった通り、そこにもっと力を入れるべきだ。立川は都会と田舎、両方の側面を持っており、もともと住んでいた住民と、新たに住み始めた住民とで新しいものを産み出していけば、魅力ある都市になると思う。また、せっかく今井先生が委員として参加しているので、長野の歴史民俗資料館で行った取り組みを参考にさせてもらい、同じようなことがやれたらとても良いと思う。今、立川ではワークショップ×ワークショップというイベントをやっているが、あのイベントもうまく育てたら、今後、もっと面白い、立川ならではのものになると思う。

（Ｂ委員）　成果指標の件、歴史民俗資料館の入館者数に変更はできないか。もしくは学習館の利用者数などにはできないか。

（事務局）　学習館の利用者数については、生涯学習分野の計画に乗せている。歴史民俗資料館の入館者数については、数値として捉えているので挙げることはできるが、来館される方は固定客が多いので、来館者数イコール立川の歴史に興味がある方のバロメーター、として表してよいのかというところがある。

（Ａ委員）　初来訪者の数字ではどうか。

（事務局）　その数字を出すのは現状では難しい。

（Ａ委員）　成果指標で子どもや学生はあるが、障害者に関するものがないので、何か指標があると経年変化がみられるのでよい。また、先ほどからつなげる人が足りない等の話題が出ていたので、つたえる・ひろげるの部分の指標に共同制作やコラボレーションの数が出ていると、どのくらい繋がりができたかが分かるのでよいと思う。

(3)到達目標の検討

・目標の案は、メールで 12 月 25 日までに事務局へ。到達目標以外の部分についてもご意見があれば、同日までにメールで送付してもらうこととした。

・事務局より今後のスケジュールと計画書について、資料を基に説明があった。

３．その他

・副委員長より挨拶

文化芸術基本法をざっと見たところ、芸術面だけではなくそれ以外のことについても記述があるので、文化というものをなるべく広い視点で見てもらいたい。また、会の後半にに出てきた歴史についても、とても大事である。昔からみんなが耕してきたものが実って、今の文化がある。我々がこれから何をしていくかとなった時、今のアーティストの活動などと繋がっていくと思う。歴史を勉強する、昔のものを展示するとなった時、ただ昔はこうだったのか、で終わるのではなく、人が何をしてきたのか、我々がその上に立って何をしていくのか、ということを考えなければいけないし、歴史をきちんと踏まえ、その上で何をするのか考えることが、立川市の芸術活動のアイデンティティーになっていくと思う。過去２回の会議の中で、市史編さんだけ別の扱いを受けているような印象があったが、そこも含めて一体にまとまった時に、面白いものが見えてくるのではないかと思っているので、今後に期待したい。

・次回は１月 21 日（火）午後３時から、本庁舎 209 会議室にて開催予定。